あべ やすし abeyasusi@gmail.com
http://hituzinosanpo.sakura.ne.jp/tabunka2020/

期末テストについて

時間に余裕があるのに正誤問題をまちがえるのは、どうなんでしょうか。確認すればわかる問題のはずです。もちろん。すべてバツ（X）が正解です。思いこみで解答してはいけません。

問題文に、「引用・参照した場合、出典を明記すること」と書いておいたのですが、解答でウェブ上の文章を剽窃（ひょうせつ）した学生は、大学文化が理解できていない。剽窃は問答無用で単位不可です。当然です。成績に関する問いあわせに応じるのに、かなりの時間をとられました。残念なことです。出典を書かないのはゼロから作文したときだけです。文章を書くときに、なにかを参照したならそれを明記するのが当然です。「語句を書きかえたらいい」というのは錯覚です。そんな理屈は通用しません。

期末テストが満点で、すばらしい解答だった学生の第15回のコメント紹介

3限（名簿順に掲載）

今まで想像したこともないようなことで困っている人たちがいると知ったことは、私にとって非常に有意義でした。特に、入居差別の問題が印象に残っています。
15回の資料では、家にいられない人の居場所がコロナでなくなったという話が印象深かったです。親に虐待紛いのことをされていた友人がいたのに、さらには私自身親とは折り合いが悪かったのに、一人暮らしをしていたせいで気づきませんでした。社会全体の大きな動きは、必ずそれが合わない人が出てくるということを念頭に置いて過ごしたいです。
「ステイホーム　できない」で検索し、ホテルシェルターという取り組みを見つけました。家が安全な場所ではない、もしくは家族に感染させたくないという人のために、ホテルの部屋を安く提供する試みだそうです。家以外の居場所があって素晴らしいと思う反面、困っていない人が安くホテルに泊まりたいとやってきたり、子どもだけで入りづらい（ホテルという場所であること、料金が3000円かかること）という問題もあると思いました。https://www.homes.co.jp/cont/press/rent/rent_00787/

https://www.hotel-shelter.net/

———

面会制限について。私の叔母の父親は老人ホームに入っています。コロナが流行してからは、面会は制限され、別室でビデオ通話をするという形を取っているそうです。叔母は関東に住んでいて、叔母の父親は愛知県にいて、今までは叔母が休みを取って愛知に来て面会するという形だったのが、今は遠くに居ても話すことができるようになったので、それはいい点だと思いました。しかし、日頃私たちが遠隔授業で感じているような、ビデオ通話ならではの悩みもあるようでした。特に高齢者は、電話音声が聞き取りづらいという問題があり、通常より会話が困難に感じるそうです。操作は職員の方がしますし、時には通訳のような形で間に入ることもあり、どうしても家族水入らずという形にはならないのは、ビデオ通話の限界だと感じました。

———

私はどちらかというと家にいるのが好きなほうなので、家庭で過ごすことがつらい人もいるということに気付きませんでした。コロナとDVの増加について調べてみたところ、前年と比べて実際に相談件数も三割ほど増えているみたいで、こんな状況なので難しいかもしれませんがそういう人たちが逃げられるような場所がどこかあればいいのにと思いました。
(参考：http://www.gender.go.jp/public/kyodosankaku/2020/202006/202006_02.html)
動画で出てきたリモート面会についてですが、少しGoogle検索しただけでもたくさんの病院が「リモート面会を開始しました」という案内を出していて、そんなに普及しているとは知らなかったので驚きました。遠くに住んでいても顔が見られるし、これからもこういうのを続けてくれればいいんじゃないでしょうか。以前友達とリモート飲み会をしたので

すが、県外に住んでいてなかなか会えない子とも久しぶりに話せてうれしかったし、逆になんで今までやらなかったのだろうと思いました。こういう状況になってみないと気付けないことってやっぱり多いです。この授業では、そういった今まで気付けなかったことにたくさん気付かされました。これからは自分でいろんなことに気付けるようになりたいです

———

全体主義の問題についての部分で、全員が自粛生活に対応できるわけではないとあったが、実際私もオンライン授業の環境作りに苦労している。というのも、私の親は節約家で、日中はリビングのみ、夜間は寝室一室のみに冷房を入れるというルールが存在した。これまで私はあまり家にいることがなく、リビングで過ごすことに意義はなかったし、家族全員が寝室で寝ることも気にならなかった。しかし、遠隔授業が始まって、発言が求められる授業がある中、他の家族もいるリビングで受けるのはとてもやりにくかった。かといって私の部屋はエアコンがなく、室温は35度を超えている。これでは、熱中症になってしまうか毎日が授業参観になってしまうと思い、私は寝室に段ボールを机替わりに置いて受けることにした。私一人のために、冷房を入れることに母は今も不服そうで、リビングで受ければよいと思っているだろう。うちにもっと金銭的な余裕があれば、あるいは、親の前でも気にせず授業を受けられる間柄だったら、このような問題は発生しなかったはずだ。このような個人的な問題は取り上げるとキリがない。それらすべてに対応できるような社会の実現は実に難しいことであるとしみじみ感じた。

———

プリントの全体主義の問題は自分自身でも感じていることなので再び考えさせられる問題でした。日本は世界的にみると比較的パンデミックから免れている国で、それはマスク着用や外出自粛といった「強制ではない」政府の呼びかけに応じる人が多かったからだという意見がよくあります。日本もそれを誇りに思っている節があるし海外からの反応もさすが日本人といったところです。前期この授業を受講した上でこういった発言は好ましくはないと思いますが、この従順な日本人性はなにか重大な欠点になり得てしまうのではないかという危機感も感じた半年間でした。また個人的な問題ですが私の家では父と弟の関係が良くなくて、でも自営業なので父が外に行くことはなく、オンライン授業のため母が仕事に出ている間は父と弟と私と3人で過ごさなければなりませんでした。特に昼食の時は父と弟の間に会話が無いのでどうやって空気を和らげるかを常に考える毎日で正直食欲はわきませんでした。暴力とかがあるわけではないし私自身が親とうまくいっていないというわけではないのに精神的にキツイ毎日が今も続いていて、時々介護をしていた母親を殺してしまった息子のニュースなどを見ると他人事ではない気がしてものすごく不安に駆られます。きっと弟にとってはバイト先が逃げ場所なのに最近はそれすらも父から咎められているし、小さな町で高齢の方も多くて最近町内の若者からコロナ感染者が出たこともあって、若者が外出していると批判的な目を感じるのですが、油断が良くないことは十分承知の上で、外出することに対してもう少しあからさまな非難は避けてもらえないかなと思います。
面会制限についても「家族のみ」というのは良くない面もあると感じます。心のよりどころが家族とは限らないからです。これはコロナ禍の状況に限った話ではなく、動画内でもあったように手術などを受ける際に家族の同意書が必要だったりすると家庭内に外からは見えない問題があった場合、患者さんが正当な治療を受けられない可能性もあるのだなと気付きました。

———

第15回資料にオリンピックの話題が出ていましたが、YouTubeで「多言語」と検索すると、一年以上前の「五輪をサポートする多言語対応技術」という動画が出てきます。内容は、小池都知事が多言語に対応した通信技術(駅の電光掲示板の多言語表示や72言語に対応した小型翻訳機など)の展示を見て回った、というものでした。新型コロナウイルスの影響でオリンピックは先延ばしになってしまったし、そもそも来年も確実に開催できる保証はないですが、そういったオリンピックで日本に来るだろうと考えられていた人たちのための努力を無駄にしたくはないし、多言語対応技術はオリンピックだけでなくいろんな場面で使えるものなので、これを機にもっと普及していって、国外から来る人はもちろんすでに日本にいる非日本語話者にもやさしい世の中になってほしいなと思いました。

———

今回の授業では、面会制限について話がありましたが、今回のコロナウィルスの影響で、病院で入院している人や妊婦、コロナ感染者などへの面会制限はもちろん、医療従事者は何か月も家に帰れなかったり、コロナが収まるまでは、たとえ休暇であっても、家族に会えなかったり、ネットでは、ちいさな子供を抱っこするのにもビニールシートを隔てて抱っこする映像を見て、コロナの深刻さや被害の及ぼす範囲の広さを感じました。

———

コロナウイルスの影響をここで書くには影響が大きすぎる程の影響を及ぼした．そんな中で生活様式が変わり，今の生活に段々と慣れてきたこの瞬間こそが危ないのかもしれない．少しなら外出してもいいか，たまには久々に外食を，マスク持ってき忘れたけどまぁいいか…思い当たる節はある．コロナにかかり自分だけが困るのであれば構わないが，感染症となるとそうともいかなくなるため気を付けたいと思う．また様々な（デマに限らず）情報に対してどう向き合っていくかというのは非常に重要である．Twitterをやっていると一日に何回も色々なニュースが流れてくる．自粛警察だと

か，Noマスクだとか…何が正しいか信じるのは個人の勝手だが，それが人の害となるのであれば一度行動を見直す必要があるかもしれない，これは別段例を挙げたものに限らず，普段の生活からだが.

———

私は情報科学部のためグループワークなどはほとんどなく、他の学生の意見を知る機会もあまりなかった。そのため、他の教養科目でも学生のコメントの紹介はあるものの、これほどまでの数のコメントを紹介する講義は初めてだった。自分が言語化できなかったことや、自分の知らない世界（家庭環境など）について書かれていたり、自分とは真逆の意見があったりと、大変刺激になった。第15回の「遠隔授業について」にもあったように、これは遠隔授業だからこそできたことだったと思うので、ある意味良いタイミングで受講できたなと思う。

———

授業では、自分が知らなかったことや考え方をあらためさせられる内容があり、今までと違った視点をもつことができました。多文化というと多国籍や外国など国としてのイメージが強かったですが、文化は人のいるあらゆるところに存在することがわかり、自分が生活する社会も多文化なのだと思うようになりました。

———

授業資料のデマの横行について読んだときに、渋谷でクラスターフェスというものが行われていたことを思い出した。コロナはただの風邪だと考えている人々が集まり主張をすることが行われていた。この考えに賛同する人が集まり、その中には賛同する親に連れてこられた小さな子どもの姿も見られた。親の意見を子どもにまで押し付けて、命にかかわる危険な目に合わせるというのはあまりにかわいそうだという気持ちを持った。コロナはただの風邪という考え方は根拠に基づいた考えではない。また他の人も同じ意見を持っているから自分も同じ考えとするのではなく、コロナは命にもかかわるためにより慎重に論理的な根拠を探し、根拠に基づいて考えることが必要だと考えた。

　この授業で一番印象に残ったことが、やさしい日本語についてである。やさしい日本語については初めて学んだ。やさしい日本語は、日本語を話す人たちにとってもわかりやすいものであると考える。やさしい日本語は、話そうとしている相手が日本語がわかるかどうかわからなくても、まずやさしい日本語を使うことで、相手が日本語をわかる方の場合にはその方のことを尊重することができわかりやすく伝えることができると考えた。もし日本語がわからない場合でも、やさしい日本語はできるだけわかりやすい情報発信となることを学び、自分でももっとやさしい日本語について学びたいと思った。

———

この授業を履修してもっと自分の立場について考えること、外国の方や障がいのある方に目を向ける必要があることに気づかされました。

———

私は先生が第一回の授業で話された「学生が興味のあるものを見つけられるように教員が情報提供をする」という話を念頭に置きながら授業に取り組んでいました。私は日本語教員に興味があり、この授業を通して、ことばに対して多方面から向き合うことで、より関心が深まりました。また、医療通訳という仕事を知れたことがよかったです。
現在マスクなしで集会を行っている人たちがいますが、それに対して反対ばかりかと思いきや、賛成の意見も見られます。賛成側の意見の根拠を知ると、本当に何が正しいのかわからなくなりました。様々な情報や意見があると、自分で考えて見極めることは難しいと思いました。また、マスクができない人たちの理由を当事者以外も知っておくべきだと思います。私は最近、感覚過敏でマスクをつけられない人がいることを知りました。私は集中講義を受けるため、半期ぶりに大学へ行きます。保健所の方の話や授業を思い出し、正しい情報を積極的に入手して安全に授業が受けられるようにしようと思います。

———

講義の面会制限の話を聞いて、「家族のみ」ではなく、本人が面会する人を選べるという制度が望ましいと思いました。まず、なぜ面会をするのかということを考えると患者の様子が心配だから、元気づけたいから、必要なものを届けたいから。などという理由が考えられます。患者側も、顔を見たいから面会したいと感じるでしょう。このような面会理由を考えれば、「家族のみ」ということにこだわることはないと感じました。また、面会自体が困難な場合にはテレビ電話を導入したなどし、どうにか患者が面会を望む人と繋ぐよう取り図ることができたらいいと思いました。

　多文化社会の講義を通して、ほかの人の気持ちを深く考えるきっかけになったと思います。外国語学部の所属として外国の人とのコミュニケーションの取り方については特に興味を持ちました。それぞれ考えや価値観は異なりますが、先入観を持たず、多様な考えを受け入れる姿勢で接することの重要性を改めて実感しました。

———

以前自分の学科の授業であるシュミレーションゲームを紹介されたことがあります。言葉の全く分からない国の学校で災害にあった設定で、避難をする間にさまざまな言語・表記の壁にぶつかるというゲームでした。
アナウンス音声や備品の表記はすべて日本語でも英語でもない、クラスのほとんどの人間が聞いたこともない言語で、実際に「言葉が全く分からない国で災害にあった」という状況を体験することができます。分からない言葉で表記された

ペットボトルを二種類渡され、飲む方を間違えるとおなかを壊す（そのペットボトルの水は飲料用ではなくトイレを流すための生水だった）など、さまざまな課題がありました。
そのゲームを体験して、私は日本の災害における多文化対応はまだ不十分なのではないかと感じました。小中高と防災訓練を受けましたが、アナウンスが多言語だったことは一度もありません。教室から校庭までの避難経路を示したマップも字は小さいし漢字ばかりで、先生の指示を聞いていないとさっぱりわからなかった思い出があります。
小学校が生徒や地域の人々のために用意したフリーズドライの非常食を見たことがありますが、ベジタリアンの人、豚肉が食べられない用のものは用意されていませんでした。
もちろん、地域の外国人の人の数によって用意する必要性がなかった可能性もあります。けれど「災害が起きたときのパンフレットを他言語で」という取り組みのほかに、避難所内での多言語・多文化対応を充実させる必要があるのではないかと思います。
面会制限について調べたところ、↓こんな記事を見つけました。
一本麻衣（2020）「「家族」でなければ情報開示できない？新型コロナで顕在化する同性カップルの不安」BUSINESS INSIDER　https://www.businessinsider.jp/post-211519
この記事で、法律上の家族ではない人たちは面会どころか情報開示さえ要求できないことを知りました。また、濃厚接触者として調べられることでLGBTの人は臨まないカミングアウトを迫られる可能性もあるといいます。
法律上の家族よりも身近であったり、理解をしてくれる人が「家族」だと認められないのはおかしいと思います。面会が家族に限定されているのは血が繋がっているから、籍を入れているからという理由ではないはずです。
感染対策であったり、プライバシーの関係から「家族」と限定されているはずが、これでは本末転倒だと思います。

———

動画で紹介されていたAmazonPrimeのThis is meを見てみたところ、特にエピソード5のほうがショッキングな内容で驚いた。日本ではトランスジェンダーの人が暴力を振るわれたり、殺されたりするといった出来事はあまり聞かない印象だが、一方でいじめ被害の割合は過半数に近いなど、そう遠い出来事ではないのだと思った。また、授業のコメントで取り上げられていたことがあった日本語の字幕の違和感を改めて認識した。エピソード5の女性たちが使う言葉がステレオタイプ的な女性の言葉遣い（～だわ。～よ。など）であることは殊更に女性らしさを演出するもののように感じられた。もちろん本人らの賛同があるなら部外者がとやかく言うことではないと思うが、もしも演出であるならより偏見を植え付けるものになりかねないのではないかと思った。
参考
大沢紗都ほか「トランスジェンダー問題」https://www2.rikkyo.ac.jp/web/taki/contents/2018/20180418.pdf

———

この授業を通して、昨年までの自分とすごく違っていたことがあります。それは、授業終わりのコメントを書くためにかかる時間です。きっと、対面授業の授業終わりに書くスタイルであれば今ほどの熱量を込めて書けていなかったと感じます。毎回の講義資料と共に、たくさんの受講生のコメントを読みました。同い年やそんなに年の離れていない方たちのコメントですが、みんなそれぞれすごく濃い経験をしているし、その経験についてこの講義をきっかけに深く考察していて、様々な考えを自分に取り込むことができ、自分の考えもより多角的なものになったと感じます。また、たくさんの良質なコメントをみることで「自分もよくよく考えなければ」と気合が入りました。コロナウイルスの影響で、対面での授業ができず、大変な思いもしましたが、このように普段友達と話しているだけ、同じ教室で講義を受けているだけでは知りえないような、受講者たちの多様な経験を知ることができたこと、そしてその熱量に合わせて、時間をかけて自分の考えをコメントにまとめられたことは、遠隔授業の利点だったと感じます。
この講義を通して、たくさんのマイノリティの方について考えを巡らせてきました。今回テストの解答の為に調べる中でも感じたことですが、今あるマイノリティの方向けの支援には、マイノリティ側がマジョリティ側に合わせられるよう努力するための支援が多い気がしました(例えば、非日本語話者に向けた日本語教室、日本の遊び紹介など)。集団の中で生きる上で、とりあえず今の生活を暮らしやすくするために仕方のないことなのかもしれないけれど、片方だけに負担が大きいような支援の在り方は見直されていくべきだと思います。そのために今私ができることとして、多文化の中で生きていることをもっと自覚し、私からたくさんの文化に歩み寄っていきたいです。
慣れない遠隔授業の中、15回分の講義、ありがとうございました。講義資料を見返しながら、今までよりも身近に感じるようになった「文化」について、コメントを書くことがなくなっても、考え続けていきます。

———

緊急事態宣言の時期には家庭に居場所のない女子中高生がSNSに助けを求め、性犯罪に巻き込まれるという事件が多く発生しました。家庭以外の居場所を提供することなく「ステイホーム」を呼びかけることは、少女たちをコロナの危険から守る一方でその他の危険にさらしていることを実感しました。また私が生活している寮では、現在家族以外の入館が禁止されています。家族といっても例えば従妹は私にとって友達のような存在です。実際どこまでの入館が許可されるのか、何を目的とした制限なのかと疑問に感じました。この授業を通して、自分自身がもつマジョリティの視点に気付

くことができました。これから客観的な立場で社会を捉えることを意識し、将来は保育の現場でも活かしていきたいと思います。

———

遠隔授業では録画されている場合、後から見ることや速さを変えることができる。説明口調かつ早口な先生は、いつも情報量が多く、講義を受けるときメモが書ききれない間に次の話題に移ってしまうことがよくあったが、録画を見れば巻き戻して勉強できる。課題は確かに多かったが、毎回何を学んだか書くことで対面授業よりも受け身で先生の話を聞くだけにならなかったのも良かったと今では思える。あべ先生はいつも資料やyoutubeの配信で多くの情報を教えてくださった。しかし、他の講義の課題や自分の生活もあるため、吸収できない情報が多かった。特におすすめの映画は時間があるときに見たいと思うし、紹介された本もぜひ読みたい。入管法や日本に来た外国人について関心をもったので第６回の「人の移動と国籍」の書かれた資料は夏休みの間に探して読む。他の講義でも期末のレポートを提出するときに、もっと時間をかけてもっと知識を深めてから書きたいと思うことがあるが締め切りに追われ、なかなか自分が満足するレベルのものを書くことができない。単にもっと早くから書き始めればよいのだが、私は始めるのがいつも遅いのでこのようなもどかしい気持ちになりながら締め切りギリギリに提出することになってしまう悪い癖がある。
新型コロナウイルスのよって何かが制限されたときにその代替案があることはとても大切だと思う。面会の家族は本人と面会したい人の間で面会を決められるようにするべきだと考える。回数や時間の制限は施設などの集団生活の場にいるため職員の負担や他の利用者に配慮し全体で取り決められているべきであるが、面会する人が血のつながった家族でもそうでなくても良い意味で周りの人には関係がなく、干渉すべきでないことだと思う。家族でなければ認められない状況において、動画内でおっしゃっていたような同性のカップルは困る。家族間の扶養の義務がさまざまなときにはたらくが、家族だと認められない状況は家族として扱われる権利がないことを表すのだと感じた。

———

私はコロナウイルスが流行しているこの状況で「家族のみ面会を許可」や「家族も面会不可」などという制限をするのは問題があると考えます。
家族の定義は法律で定められておらず、家族の定義は人によって異なります。よって病院の考える家族の定義、患者の考える家族の定義、面会に来る人が考える家族の定義が異なってしまいます。例えば病院が考える家族の定義が血縁関係に基づいていた場合、学校の先生や友人は「家族のみ面会を許可」とされている場合には面会できなくなってしまいます。私には児童養護施設で育った友人がいます。彼を育てていた施設の職員と彼の間に血縁関係はなく、彼はその職員のことを先生と呼んでいた。しかし彼はその職員を自分の家族であると言っていたし、施設にいた他の子供達とは兄弟のような仲でした。逆に自分の母親のことは家族として認識しておらず、血縁関係にあっても保護者として考えていませんでした。もし仮に彼が病院で入院し、「家族のみ面会を許可」とされたときに、病院側の家族の定義が血縁関係に基づいたものであったとすると、施設の職員や他の子供達は面会できなくなってしまいます。また、彼が家族と考えていない母親は面会に来ることができてしまいます。患者の権利に関するWMAリスボン宣言には患者の尊厳に対する権利のことが書かれており、「患者は、その文化および価値観を尊重される」としています。
『患者の権利に関するWMＡリスボン宣言. 17.H. （日本医師会訳）. THE WORLD MEDICAL ASSOCIATION, INC. WMA DECLARATION OF LISBON ON　THE RIGHTS OF THE PATIENT』https://www.med.or.jp/doctor/international/wma/lisbon.html
病院が考える家族の定義を患者に押しつけることは患者の価値観を尊重していないといえます。コロナ感染拡大を防ぐために面会の制限は必要かもしれませんが、その際に患者の意思や考えを尊重することも大切だと考えました。

———

コロナウイルスに関する報道番組の在り方について考えた。ある番組では放送日は毎日専門家がコメンテーターとして出演し内容のほとんどがコロナに関するものである。数値や傾向、奥に潜む問題点など深刻な内容で、視聴者を油断させないとともに不安を煽っているようにも見える。一方違う報道番組ではコロナに関することももちろん報道されるものの感染者数など簡単な情報のみで、エンタメや番組内のコーナーに時間を多く使い、これまでの日常をまるで取り戻したかのような構成がなされている。もちろん様々な情報源から情報を得ることが最善であるものの、時間的、環境的要因からその番組しか見ることができない人がいたとするならば、このように偏った番組構成でいいのだろうか。

———

この授業を受けはじめて、世界の見え方が大きく変わっていきました。いままで気が付かなかった、些細な事に注目するようになりました。自分が普通の人、と思っていましたが、それは、多数＝普通という考えが前提にあったからこその考えであり、間違っていたと分かりました。人数に関係なく、その人のもつ特徴に対して、1対1で対応することの重要さを学びました。国や市町村の少数者への対応に欠陥があったり、反対に、世界の先駆けとなるような対応をしているところがあったり、と日本の現状を知ることができました。自分も一人の人間として、今より多くの人にとって過ごしやすい世の中になるために何ができるか、日々考えて生きていきたいです。

この講義を1年後、2年後、、、10年後に受けたら、また違う発見や、今よりもっと深く理解できると思うので、定期的に読み直したいと思いました。

———

私には今年の六月になくなった祖母がいます。コロナウイルスが流行しはじめた頃に入院し始めたために、実際に面会制限がかけられていてなかなか会いに行くことができていませんでした。しかし、実際には無理だったかもしれませんがコロナウイルスが落ち着いたら会うことができるだろうと思っていて、あまり深く考えていませんでした。父から祖母の状態を写真で見せてもらったりしていたので大丈夫だなという気持ちもありました。私たちが面会制限があるためになかなかお見舞いにいけないので祖母はとてもさみしそうにしていたそうです。ある日、いきなり祖母が亡くなったと聞かされました。衝撃がすごくてあまり実感がわきませんでした。祖母が最後にさみしくなくなってしまったと思うとコロナウイルスが憎いです。ただ、面会制限も必要なものだと分かっているのでとても複雑な気分です。
この授業は難しいこと考えることがとても多かったので、実際に対面で受けたかったなと思います。

———

大学という新たな学びの場での生活が始まると思っていたら、世界的なパンデミックのためにオンライン授業を余儀なくされてしまった。一部対面になった授業もあったようだが、外国語学部の僕は一回も学校へ行くことなく前期の授業を終えようとしている。日本では初めは緊急事態宣言が出され外出自粛が求められていた。しかし、時が経ち経済を動かさないといけないということで「Go to トラベルキャンペーン」なるものが行われた。世の中では、少しずつ規制が緩和されていくなかで僕たち大学生の生活は変わらなかった。多くの人が集まるから難しいということが頭の中では理解出来ても、一部の大人は飲み屋に行き感染するなどなかなか納得出来ない部分もあった。学校に行けないし課題はたくさんパソコンで書かないといけないし、思っていた大学生活とかけ離れていると思っていた。でも、今回の先生のまとめの感想にもあったように、最初は慣れなかったパソコン操作も上達し、文字を打つのも早くなり、文章も少しは大学生らしいものが書けるようになったり、パソコンでスペイン語を打てるようになったりと得られたものは意外と多いのではないかなと感じています。また、この授業を通して毎回の授業の中で自分が特に気になったことに関して調べたり、ほかの学生との意見の交流が難しい中で毎回のよかったコメントを見ることで他の生徒の考えや体験を知ったりすることで新たな知識をたくさん得ることができた。

———

今日の講義で、遠隔授業だから直接生徒からのフィードバックがなく、周りに流されてさぼる人もいれば、自分のペースを保てる人もいるとありました。これを逆に考えると、ある意味私たちは、自分を試されたのではないかと思います。みんながどれぐらい真面目に授業に取り組んでいるのか、どれぐらい自主学習をしているのか、全く分からない状況で不安だらけの日々でしたが、やれる人は、どこでも、どんな状況でもやるんだな、と強く実感する場面が多々ありました。自分はというと、（私はスペイン語専攻なのですが）オンラインだからわかりにくい、とかネイティブの先生と画面越しで話すなんて無理がある、と何かしらに理由をつけて真面目に勉学に励まなかった、というのが事実です。ですが、この授業に参加している人たちは、みんな授業プラスアルファのことを自分で調べて、考えて、コメントしていて、その姿を見て自分もおかれている状況に言い訳をするのではなく、今だからできる最善のことを見つけていかなければいけないと思いました。そして、自分のコメントは一回も紹介されなかったのがとても悔しいのと同時に、あんな薄っぺらいコメントは紹介されなくて当然だ、と思う気持ちもあります。普段から自分がいかに、言葉だけ理解したつもりになって表面的な部分にしか目が向けられていないのか、わかりました。例えば、「文化」という言葉を説明しろ、といわれても具体的に出来なかったり、障害者や同性愛者の人を理解していると思っていたけど、そもそも「理解する」ということ自体が、自分が知らず知らずのうちに多数派にいて彼らを少数派とみなしている行為だったり。今後は、今まで自分が当たり前だと思ってきたことに違う角度から、違う立場から向き合って、学んで、自分でしっかり考えていきたいと思います。前期間、オンラインとはいえ、こんなに学びのある授業をありがとうございました。また機会があればよろしくお願いします。

———

今回の講義でデマの横行についての話があったが、私は以前、実際に新型コロナウイルスに関するデマに遭遇した。それは母が友人から得た情報で、武漢の研究所に派遣されている先生によると、コロナウイルスは耐熱性がなく、56-57度の温度で死ぬため、お湯を飲むことで予防が可能だという内容だった。その友人は、信頼できる情報だと言っており、母はこの情報を信じて、すぐに家族のグループラインに内容を送ってくれた。しかし、私はそんな簡単なことで感染が防げるのかと思い、あまり信じていなかった。そこでお湯でのコロナウイルスの予防について調べてみると、これは私の家族に限らず「中国語圏の知人・家族から聞いた」といいSNSで拡散されていたデマだった。 この対策について、医療ガバナンス研究所の上昌広理事長は以下のように述べていた。
お湯を飲むことで新型コロナウイルスが死滅し、肺炎を予防できるというのは常識的に考えてありません。〜また摂氏26度や36度でウイルスが死滅するのなら、人間の体温が36度付近なので体内に入った時点で死滅するはずなので全く根拠のない話です。

SNSの普及で昔よりも多くの情報が行きかうようになり、その中にはうその情報が含まれている可能性も少なからずある中でこのような経験をし、一度得た情報を疑い、正しいのか調べて確かめることの重要性を、身をもって感じた。講義でもあったように、今のような感染拡大による混乱の中では、自分にとって有効となる情報を普段より信じやすくなってしまうため、より警戒が必要である。また、毎日同じニュース番組や新聞記事からのみ情報を得ると、情報の偏りにつながる可能性があるため、情報の入手先の数を絞りすぎないことも大切なのではないかと思った。
参考：HUFFPOST　安藤健二 2020年2月25日「新型コロナウイルス『お湯を飲んで予防』のデマ拡散。専門家は『常識的に考えてありえない』」
https://www.huffingtonpost.jp/entry/hot-water_jp_5e54987fc5b66729cf6120e9

———

新型コロナウイルスによる人々の過剰反応には問題があると思います。電車内でマスクをしていない人や少し咳をした人に対して過剰に反応して心ない言葉を発せられた人もいるというニュースを聞いて行き過ぎているのではないかと驚いたことがあります。また、「デマの横行」に関してPCR検査で陰性だったから気にせず出歩いて良い、という誤解をしている人も少なくないそうです。そのような間違った情報を信じている人が増えてしまうと逆効果になってしまい元も子もないと思います。今まで起こったことのないことが起きた時は特に人々がいかに正確な情報を持っているかがポイントで、SNSが日常的に利用されている今、新型コロナウイルスという一つのことに関して数えきれないほどの情報が溢れておりそれを信じたいものだけ（自分の都合の良いものだけ）信じて誤解を生んでしまうような状況はとても危険だと思います。信憑性のない情報に振り回されず信頼できる情報かを批判的に吟味することが重要なことだと今回のコロナの流行で改めて感じました。また、初めてオンラインでの授業を受けてみて、やはり家の自分の机で授業を受けるというのは違和感を感じました。家の中に自分だけという環境を作るのは難しく、音が入らないように、映らないようになど今までとは違った苦労を要する場面がたくさんありましたが、オンデマンド式の授業は何回も同じ授業を自分のペースで受けることができたのは良い点だと思いました。「多文化社会とコミュニケーション」では特に毎回の配布資料で前回の内容のいろいろなコメントを共有することができたのでそこで新しい視点に気づいたり、きちんとフィードバックすることができて良かったです。多様な文化を学ぶことはもちろん、そもそも多文化とは、多言語とはなど今まであまり疑問を持つことのなかった部分に着目して根本的なところを考え直すことができ、多文化に対しての自分の視点が変わりたくさんの考え方をすることができるようになりました。

———

4限（名簿順に掲載）

新型コロナウイルスの影響で、様々な方向に影響が出ています。大学生だけでなく、高校生もオンデマンドで授業を行っていた時期がありました。私の弟は高校三年生で、オンデマンドの授業を受けるにあたって自分のパソコンを持っていませんでした。なので私のパソコンを貸していました。私も大学のライブ授業があったため、私がパソコンを使わない時間を見計らって共用していました。今回のコロナウイルスの影響でパソコンなどの端末がなかったり、使い慣れていないと厳しい状況であったと思います。

———

15回の授業、あっという間に終わってしまいました。遠隔授業という初の試みで先生方も苦労されたとは思いますが、どうもありがとうございました。多文化社会とコミュニケーションというこの授業は、２年前、私が大学１年生の時からずっと受けたかった授業です。２年前は抽選に外れてしまい残念ながら受講できませんでしたが、今回、最後まで自分の中でも悔いなくやり切ることができて本当によかったです。比較的時間のあるオンライン授業であるからこそ、たくさんのことを考えることができましたし、自分のためにもなったと思います。
暑い日が続きますが、お身体に気をつけてどうぞご自愛ください。半期間、どうもありがとうございました。

———

現在の夏は40度前後の気温に襲われることが一般している。その中で熱中症を予防するために多くのメディアがエアコンをつけて生活するように声かけをしているのが見かけられる。しかし、私の家では昼間はエアコンをつけてはいけないというルールがあり、どれだけ暑くても扇風機で耐えなければならない。このルールを作ったのが一緒に暮らしている祖父母らしくずっと守ってきたルールであるが故に今でも変わらないルールとなっている。
しかし、今では35度を超える日(猛暑日)がほとんどである中で祖父母も80歳近くになっている。いつ熱中症になってもおかしくない状況中で常に生活していることになる。さらに怖いのが二人は歳のせいか暑さを感じないらしく、夜母が寝室のエアコンをつけておいても勝手に消してしまい、かなり暑い中で寝ている点である。
昔に比べ環境が変わっているが、人が昔の感覚のままだと環境に適応できない。臨機応変に
環境に合わせた生活をするのも大切ではないか。

———

今年は例年よりもコメントの質が上がっているのではないかと10回目の授業を過ぎたあたりから勝手に思い始めていたことが、今回の授業プリントに記された先生の感想から事実であると分かり、「やっぱりな」という気持ちになった。プリントに掲載されたほかの学生の意見は考えさせられるものが多く、YouTubeの授業に関連した動画が紹介されているという点もよかった。遠隔授業で先生の「どうでもいいような雑談」と聞くことができなかったのはとても残念であるが、遠隔授業だからこそ質の高いコメントが提出されたということは、それはそれで遠隔授業のいい所なのではないかと思った。私自身がこのようなオンデマンド型の遠隔授業に対してあまりいい感想を持っていなかっただけに、学生のコメントの質が上がるという点はオンデマンド型のいい所なのではないかと感じることができた。

———

私の母は薬局で品だしをする仕事をしている。このコロナ渦でマスクや除菌スプレーの需要が高まり、品切れという状況が続いた。ニュースでも取り上げられていたように、母もそれによる混乱の被害を受けていた。何度わからないと答えても「いつ入荷されるのか」と聞いてくる客、「本当は裏に隠してあるに違いない」などと責めたててくる客がたくさんいて、日々謝罪の言葉を口にしていると嘆いていた。毎日、朝一で来店してマスクを買っていく人もいるので、他の人も購入できるようにと不定期な時間帯で店頭に並べたりもしていたそうだ。そうするとそれを見かねて「朝には並べてなかったじゃないか、卑怯すぎる」とクレームが入るそうだ。従業員が決めてやっていることでもないし、店側もどうしようもないのに．．．と母も日々参っていた。そういう客は不安だけにとらわれ、自分の都合だけを考えて情報を判断しているのだと思う。危険が迫ると自分勝手になってしまいがちだけれど、そんな時こそ他人を思いやることの大切さが顕著に表れてくることを実感した。異例の状況が続き、考えを及ぼすのが難しいこともあると思う。でも、まずは目の前の人をどう思いやって助け合えるかを常に考えていくこと、分からなければ自分から知ろうと動いてみることが共生のために重要なのだと思う。

———

約半年間、多文化社会とコミュニケーションの講義を受けてきて、これまで小学校、中学校、高校で学んできた内容を活かして自分の考えや世界で起きているさまざまなことに目を向ける講義であった。この講義の中でこれまで自分が全く意識していなかったことや考えることが無かったことに気づかされ、あらゆる視点からものごとを考えさせられた。例えば私が普段の生活の中で不自由だと思わなかったことが障害をもった人から見ればとても不自由であるかのように、客観的にものごとをとらえる力が私に身に付いたと思う。これこそが大学で学ぶべきことである。必ずこの講義で学んだことや知った事、身に付いた力が今後の人生でいきてくると私は確信している。半年間、ありがとうございました。この講義を受けて良かったです。

———

[第15回へのコメント]
講義資料のコロナウイルスの影響に伴う全体主義の問題で思い当たることがあります。
最近では、一歩外に出るとマスクをしていない人がいないと言っていいほどマスクの着用が定着しています。
私は先日眼科に行ったとき、急いでいたためマスクを忘れてしまいました。
病院には「マスクの着用をお願いします」という目立った張り紙があり、看護師さんや患者さんは私以外全員マスクをしていました。
そのため、自分だけマスクを着けていないことにすごく罪悪感がありました。
また、周りの人からの視線を感じたので、「なんでマスクを着けていないの」と思われている気がして肩身が狭くなりました。
その時に、私は今まですべての人がマスクを着けるべきだとが当たり前のように感じていたがゆえに、自分がマスクをしていない人に対して批判的な目で見てしまうことがあったと気が付きました。
そして、もし自分が小さな子供や障害のある人の立場で、やむを得ずマスクを着用できなかった時、本人や付き添いの人は、周りの人の冷たい視線によって、きっと辛い思いをするはずだと感じました。
自分がマスクを忘れたという出来事により、このような「すべての人がマスクをするべき」という全体主義的な考え方がマスクを着用できないマイノリティへの差別を生むきっかけになることを、身をもって感じました。

[遠隔授業を通して]
特に、他の生徒のコメントを公表していただいたおかげで、様々な人の考え方や経験、学びを知り、自分の理解を深めることが出来ました。
また、Youtube配信のチャットやzoomの機会を設けて下さったおかげで、先生と生徒が一体となった講義を受けることが出来ました。

私はオンデマンド型の授業が多かったため、先生のお顔を全く知らないまま前期が終わった講義が沢山あります。そのため、対面授業のように先生のお顔が見ながら講義を受けられたという点でも、この授業の配信は私にとって貴重なものでした。
また、配布資料の各ページに「第〇回-〇」と講義の回数とページ数が印刷されていたことは本当にありがたかったです。プリントが混ざってしまった時も混乱することなく資料整理をすることができました。

———

今回の動画資料のなかであべ先生が触れていた、面会できる「家族」の線引きについて少し考えてみた。「家族」と一括りで言っても、「家族の形」というのは人それぞれであるため、何を持って家族とするのかは難しい問題であろう。そこで、同性愛者同士の場合はどうすれば家族として法的に見なされるのか調べてみた。『同性愛者のパートナーシップ』（砂川、2009、p.9）によると、日本では同性カップルのパートナーシップを保護する法制度は無いため、年上の者が親となることで家族になり、法的保護を得ることが少なくないらしい。これを知って私は違和感を覚えた。どうしてカップルなのに、そのままの形で家族になれないのだろうか。「日本は同性愛者に対する対応が遅れている」などという事を耳にしたことがあるが、今回この論文を読んで事態は深刻だと感じた。現在、コロナ禍の中でパートナーの見舞いに行くことの出来ない同性愛者の方々は、さぞかし不安で不満であるだろうと思う。授業資料にもある通り、この「家族の線引き」にかかわる問題は、今回のような非常事態によりはっきりと見えてきた問題の一つである。このように日常には、自分の気付かないところで疎外感を覚え、苦しんでいる人達がいる。それは、この「多文化社会とコミュニケーション」の講義で学んだことの一つである。この講義の中では、私たちが普段生活する中では考えないようなことに着目した内容も取り上げられ、深い学びへのきっかけを得ることが出来た。自分が日常生活の中で気づかずに陥ってしまっている全体主義に気づかされることも多々あった。これからよりたくさんのことを学んでいく立場である一年生のこの時期に、この講義を受けられたことをとてもうれしく思う。この講義で得たものを大事にしながら、これからもっと積極的に学んでいくつもりである。前期間、講義をしていただいてありがとうございました。

———

YouTube配信で先生がおっしゃっていた「ディス・イズ・ミー～ありのままの私～」のエピソード３と５を見てみました。マイノリティの人たちはマジョリティと同じように普通に生活を送ることもできなく、とても生きづらい社会であることがひしひしと伝わってきました。最近は渋谷の公園に透明の壁のトイレが設置されたことが話題になっていました。(https://www.cnn.co.jp/travel/35158377.html)公衆トイレの悪いイメージを一掃することが目的だそうですが、画像を見てみると設置されていたトイレは女性用と男性用、そして車いすと腹部に十字架がついたピクトグラムが表示された多目的トイレの三つで、LGBTの方が使えることを促すようなピクトグラムはありませんでした。上記のドキュメンタリーのエピソード３で男性が言っていたように、男女のマークをはずすことはそれほど難しいことではないように思えます。衛生面、安全面に意識を配るのも大事ですが、すべての人が同じように安心して使えるトイレを作ることも同じくらい大事なのではないかと思いました。

———

今回の授業では同性カップルが直面する問題について注目しました。今までは同性婚がなぜそれほど必要だという訴えがあって、反対に同性婚は認められないと拒否する意見があるのかがよく分からなかった、というよりも何も考えようとはしていませんでした。しかし、同性カップルが家族と認められず、面会拒否されているということを聞いて、今まで抱えていた疑問について調べました。まず、同性婚はまだ日本では採用されておらず、同性カップルは法的に家族と認められていませんでした。その理由は同性婚を認めることは「婚姻は両性の合意のみに基いて成立」するという憲法に違反することになるからとありました。しかし、私はそういうときこそ憲法を変える、または解釈改憲をするべきだと思います。同性カップルは家族じゃないから、面会もできない、場合によっては葬式も参加させてもらえない、相続もできないのです。それは不平等です。コロナ危機によってあらゆる問題が浮き彫りになりましたが、これらの問題に対し、社会が変わっていかなければならないのだと改めて感じました。

　また、私は以前三河弁について記述しましたが、今までの授業を振り返っているうちにそれは少し考えが浅かったと感じました。そのときは、自分があまり三河弁を使わないという理由で今の時代の若者皆使わないものだと決めて付けていました。しかし、三河地方と言っても該当する地域は広く、そこで暮らす人々がどんな言葉で話しているかは分かりません。地域によっては方言がきつい所もあれば、全く話さないという所もあると思います。しかも私の両親は三河出身ではなく、尾張出身です。つまり家では名古屋弁を聞いていたことになり、私の三河弁は友人や地域の方との交流で得られたものだと言えます。このように、自分がそうだからといって他の人もそうだと思い込むことは正しくないけれど、落ち入れやすいことです。逆に、何か社会で問題があっても自分が知らないことは知らないままです。この授業を受けて、前者のような自己中心的な態度は完全にはなくなったとは言えませんが、確実に誰がどのような問題を抱えているのかというような今まで見えていなかったことが見えてきました。そのように社会の一人ひとりの理解が広まることで、少しずつ改善できるのではないかと思いました。

【あべのコメント：同性カップルが家族になる方法はあります。日本では同性婚がみとめられていないので、養子縁組をすることです。カップルが親子の関係になることで、法律上の家族になることができます。もちろん、やむをえず、仕方なくです（おすすめ記事：「同性パートナーの相続と養子縁組 その効力と注意点」永易至文（行政書士） https://souzoku.asahi.com/article/13265834）。また、よく知られているように、それなりに多くの自治体でパートナーシップ条例ができています。】

———

第15回/授業全体へのコメント

全15回の講義を通して私は、自分の視野がいかに狭かったかということを痛感した。レストランのメニュー一つとっても、その利用者は多岐にわたり、人によっては不快に感じたり、利用しにくかったりする。自分や身近の人が社会に対して生きづらさや不快さなどを感じて初めて、それが変えなければならない問題であると気づく。しかしあべ先生の講義を受講して、様々な実例を取り上げて自分が無意識に避けていた人々や考え方を知った。私はずっと国籍・性別・年齢・地域・障がいなどで人をカテゴライズしていたのだと思う。そのような意味で、第2回の誰もが利用しやすいようにと提唱することは簡単だが、「みんなって、だれのこと？」という言葉がとても印象的だった。対象のものが具体的にどのような人々に利用されるのかということを考え、実際にそれが利用しやすさにつながっているのか当事者に確認をとるまでが必要なのだと感じた。

———

第15回講義資料で「そういった事態におかれている人の境遇をまったく知らない人もいる。だからこそ、「ステイホーム」を連呼できてしまうのだろう。」とあるように”知らない”からそれが最善でない人に対して間違ったことをしてしまうことが多いと思いました。前の講義の動画資料であったように濃厚接触者の定義を知らなくてより不安になってしまう人がいたり、今回の講義資料にあるようにデマを信じてしまったり、過剰に反応してしまう人がいるのはやはり”知らない”という点が関係していると思いました。すべてが良くなるとまではいかなくても、知識をつけることはとても大切だと思いました。

———